

● 5月選評

小島なお

・青野 椰栄（東京都）

エイリアンは

銀のスーツなんて着てない

私の古着きて今晚やってくる

「まるで僕らはエイリアンズ」。私も君も互いの異邦人であり続けるしかない。わかりあえなさをわかりあうために、今晚も君が私に擬態しながらやって来る。

・ヒラノユリア（神奈川県）

この気持ちは誰のものか

わたしはからだをかりている

いつかひとつを知る

借りもののからだのなかに生まれる感情もまた借りものののだろうか。脳、心、遺伝子、世界、神。感情はだれの所有物か。からだを返すときに知る。

・小沢旭（山梨県）

左右の並木のポリリズム

最小公倍数を求めきれずに

靴底はもう校庭を踏まない

右と左に並ぶ木々がからだに刻んでくる多重リズム。時間の拍動は人の歩みを前へ前へ推し進めるばかりで、私たちはちっとも〈今〉という解を求められない。

・藤 雪陽（長野県）

肉体の影の消えゆく花八手

冬のはじめを教えてくれる八つ手の白い花。翳に翳を仄暗く重ねる大きな葉は、天狗の扇とも。永遠を表わす「八」の神秘に、かりそめの輪郭は隠れてしまう。

・もぐもぐ（群馬県）

くりあがる筆算できず

春の鳥

十の位、百の位へ数をくりあげるときの、数の錘がふいに消失するようなすずしさ。飛ぶ鳥は、自分の身を春空へくりあげて軽いかどうか。

・香取小春（宮崎県）

消灯の部屋でお腹を揉んでたら

土星のことを知りたくなった

灯りの消えた部屋には、徐々に身体が膨張して広がってゆく。いつしか私の腸内となった空間で、巨大ガス惑星の土星がふわふわと親しげに漂い出す。

・永山 逢海（神奈川県）

とかげのしっぽ

ほしい

わたしがいなくなったら

かわりに

てをふつといてほしい

切り離されたとかげのしっぽはいつまでとかげなのか。私がいなくなった後の私に纏わる記憶はどこまで私なのか。しっぽの、手の、代わりをお願いね、って。

・西橋間 端新（東京都）

田も捨てて

メトロポリタン来ましたが

メトロポリタンわれ立ち入れず

田はお金を、お金は日々を、日々は自分を失わせる。自分を無くしてたどり着いた大都会は持たざる者を受け入れない。メトロポリスの語源は母なる都市。

・折田 日々希（神奈川県）

地下鉄のホームの風はきもちいな

詩と経済の私生児なのに

かつて幾たびも蜜月にありながら、精神の法律上婚姻関係にはなりえない詩と経済。どちらの子としても生き切れないけれど、懲りもせず日々を抒情する。

・広田 土（大阪府）

水族館の鰯の大群眺めつつ

「前髪に命、

宿ってるんだって。」

吐いて捨てるほどある命。蔑まれたり、値踏みされたり、歪められたりするなかで、信じられて、愛することのできる命は、見つけて、創り出すしかない。